

新学長からのメッセージ

一橋大学長

山内 進

Susumu Yamauchi





一橋大学のよさを 世界にどう見せるか

日本の大学が世界の大学と直接競争するようなことは、以前はほとんどありませんでした。しかし、グローバル化が進展し世界の大学との競争が激化している現在では、日本の大学にとって、その魅力を世界に向けて発信することが非常に重要になっていきます。本学もその魅力を世界に発信すべく様々な取り組みを行ってきましたが、これには社会科学系大学ならではの難しさと、逆に強みがあると考えます。

理系の大学では、研究成果は、英語で書いて世

界に問いかけることが一般的です。「世界の大学ランキング」などでは、こうした論文の内容や引用回数などが、研究者や大学の評価基準の一つになっています。しかし社会科学系の世界では、経済学の一部を除けば、学問の研究対象がおおむね国内の事柄なので論文を英語で書く必要性が低く、また論文のあて先は日本であり日本人であるのが普通でした。例えば、日本の法律を論ずるには、まず日本語で論文を書いて議論するのが当然で、最初から英語で論文を書く理由も必要ありません。こうした難しさがあるなかで、本学が世界的にもすばらしい大学であることを証明していかなければならないのです。

一方では、国内の問題を解決することによって世

「世界で最も強靱でSMARTな大学」に

界に貢献できるという強みもあります。現在の社会が抱える諸問題には、先進国間で共通しているところも多く、また、新興国にとっては、日本のこれまでの経験が大いに参考になることもあります。日本における様々な問題解決の経験は、グローバルな意味を持っているのです。したがって、われわれの成果を英語等で発信するのは十分に意義があります。

本学の教育や研究は、世界的に見ても非常に高いレベルにあります。もちろん国立大学として日本国民に対する直接的な貢献も大事ですが、国内だけに目を向けているのではなく、優れた研究成果を英語で世界に伝え貢献することも極めて重要な役割で、そのために必要な支援方法を模索するとともに体制を整えていきたいと思えます。

例えば英語教育…… 進む国際化対策

本学の国際化については、既に戦略の基本的な枠組は決まっており、それをどのように具現化していくかがこれからの課題です。そこで常に問題となってくるものの一つに、大学での英語教育があります。

本学は、実践的な英語力を身に付けることにより、総合的な英語力を高めることを目指しています。重要なのは、読む力とともに、書く力、聞く力、話す力をトータルにバランスよくつけることです。そのうえで専門分野について議論する力やビジネスなどで使う英語を鍛えていくことです。日本では読むことに力を入れ、英語で考え、表現することに教育の時間を余り振り向けてきませんでした。しかし、考

え、表現する訓練をすることで会話力もついてきます。その意味で、学問的に高度な英語力と会話力、その両方の教育が今の大学に期待されているのです。英語教育は、本来大学だけの問題ではありません。国の教育体系全体のなかで総合的に捉えていくべきものだと思います。しかし、大学は社会への出口に近い分だけ、担うべき責任は重いのです。

こうした問題に対して一橋大学では、ブリティッシュ・カウンシルの協力を得て、トータルな英語力強化に力を入れています。弱点を補うという意味で日常会話にも力を入れています。狙いはあくまで総合的な英語力の向上です。もともと力のある学生が多いので、期待以上の効果があがっています。

学生には 海外に飛び出してほしい

大学での英語教育を充実することで、グローバル化に対応したツールを身に付けることはできます。しかし、ツールだけでは、世界を相手に活躍することは難しい。そこで学生には、学生時代に少なくとも一回は海外での生活を体験してもらいたいと思っています。日本語が通じない、また日本的な価値観が通じないような海外で、自分と向き合う時間をつくってほしいのです。こうした経験を積むことで、本学の優れた点も不十分な点もわかってくるでしょうし、何よりも世界と自分との距離を実感できるはず。またそのことにより、自分の可能性を広げることでもできるでしょう。

最近、企業の人事担当の方とお会いして、本学の学生の印象についてお聞きする機会がありました。その際に私が気になったのは、本学の学生は「頭は

よいが、おとなしい」という意見があつたことです。最近の日本の学生は、様々な面において便利で豊かな環境に暮らしており、あたかも海外と積極的にかかわらずとも生きていけるような錯覚に陥ることがあります。ところが世界中に拠点を持ち、人々との交流がある大手企業の担当者からすると、日本の学生は全般的にひ弱に見えてしまつてます。そこで、本学の学生には、「賢くもあるが強靱」であつてほしい。本学には幸いにも、卒業生などの支援による充実した留学制度があり、また、それ以外にも短期留学プログラムが整備されています。学生諸君には、ぜひ大学が備えているサービスを利用して、海外に飛び出し大きく成長してほしいと思います。

本来の強みに カッコよさをプラスする

これまで本学は、「アジア・ナンバワン、世界オンリーワン」のスローガンを掲げ、様々な試みを行ってきました。今後もこのスタンスに変わりはありません。しかし私は、そこにもう一つだけ加えたいことがあります。それは本学を「世界で最も強靱でSMARTな大学」にしたいということです。「smart power」という言葉があります。これは、米国の戦略国際問題研究所（CSIS）が発表した概念で、軍事力や経済力といったハードな力ばかりでなく、文化や技術といったソフトな力を基にした国際協力を総合的に展開するという、新しい形の対外政策戦略です。私の考えるSMARTとは、CSISの概念と同様にハードとソフトを



新学長からのメッセージ

山内 進

(やまうち・すすむ)

1949年北海道小樽市生まれ。1972年一橋大学法学部卒業。1977年同大学院法学研究科博士課程修了。1987年博士（法学）取得。成城大学法学部教授、一橋大学法学部教授、法学部長、理事等を歴任。2004年、21世紀COEプログラム「ヨーロッパの革新的研究拠点」の拠点リーダーに就任。2006年副学長（財務、社会連携担当）、2010年12月一橋大学学長に就任。専門は法制史、西洋中世法史、法文化史。『北の十字軍』（講談社）でサントリー学芸賞受賞。その他『新ストア主義の国家哲学』（千倉書房）、『掠奪の法観念史』（東京大学出版会）、『決闘裁判』（講談社）、『十字軍の思想』（筑摩書房）など著書多数。

併せ持つ賢明さを意味しますが、やはり「粹」のユアンスを込めたいですね。大学のハードとは本来あるべき教育や研究のことで、そのプラスαとしてのカルチャーやアトモスフェアといったソフトでも、大いに魅力を発していこうということです。例えば、学生のみなさんが自由に集まれるような空間づくりなどに象徴されるキャンパスのリノベーションも考えられるでしょう。また、卒業生の尽力により昨年設立された兼松講堂を活動拠点にするレジデントオーケストラ「国立シンフォニカー」も、そうしたソフトの好例になると思います。大学にいてだけで感性が磨かれるような、そんなキャンパスづくりを進めたいものです。そして、このようなことが、本学の魅力の一つとなり、その魅力が世界中の受験生を引き付け、また、卒業生の誇りともなれば嬉しい限りです。

ただSMARTというソフトの面が強調されるので、これに強靱という言葉を加えたいと思います。物事をなすには強さが必要です。「世界で最も強靱でSMARTな大学」。中身があつてタフでカッコがいい、文化の薫りがする大学。こうした魅力づくりは、世界で競争していくうえでも大切な要素だと思います。（談）